
【試験作】機動戦士ガンダムSEED —交錯する明日への軌跡—

鮮血の刻印

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【試験作】機動戦士ガンダムSEED — 交錯する明日への軌跡 —

【Nコード】

N3791V

【作者名】

鮮血の刻印

【あらすじ】

駄文作者こと鮮血の刻印が考え、皆様より募集したオリジナルの機体を機動戦士ガンダムSEEDの二次創作に出しました。

この手の物がが嫌いな方は、お戻りください。

あくまで試験的なものであり、本格的な連載はいつになるかわかりません。 悪しからず。

今回のお話は、オーブから宇宙に上がった後のL4 コロニー・メ
ンデル宙域での戦闘で、ドミニオンが接近し、アークエンジェルが
それを感知する所から始まります。

（前書き）

駄文作者こと鮮血の刻印が考え、皆様より募集したオリジナルの機体を機動戦士ガンダムSEEDの二次創作に出しました。

この手の物がが嫌いな方は、お戻りください。

あくまで試験的なものであり、本格的な連載はいつになるかわかりません。 悪しからず。

今回のお話は、オーブから宇宙に上がった後のL4 コロニー・メーデル宙域での戦闘で、ドミニオンが接近し、アークエンジェルがそれを感知する所から始まります。

「接近する大型の熱量、感知！ 戦艦クラスの物とされます。
距離700、オレンジ11、マーク18α！ ライブラリ照合…
……ありません！」

熱源を感知し、サイがマリューに詳細を伝える。

「総員、第1戦闘配備！」

マリューの声に倣い、サイはアークエンジェル内の全員にその旨を伝える。

「くそっ、こんな時に………！」

「こんな時だからこそ、なんでしょうね。」

「分かってるよ!」

カタパルトに機体を移動させながら苦々しく言うムウに、ゼウは苦笑いしながら返した。

「フリーダムとジャスティスは?」

「問題無いよ。」

「俺もだ。」

ゼウの確認に、キラとアスランはすかさず返し、出撃できる事を伝える。

「俺はクサナギにいるから、少し出遅れる。
その間、頼むぞ。」

「了解。」

キラが頷き、アスランも頷いた。

と、その時大きな振動がコックピット内に響く。

「いきなり撃ってきたか……………」

連合か、或いはザフトか……………」

どちらにせよ、自分達は邪魔でしかないらしい。

「嫌われてるなあ……………」

機体を発進させるまでは、のんびりしよう。

呑気にそう思い、目を閉じる。

そつでなければ、緊張と恐怖で死にそうだった。

呑気な気持ち（偽りの仮面）は、どれほど緊張と恐怖（本当の自分）を隠してくれるだろうか？

「こちらは、地球連合軍宇宙戦闘艦、ドミニオン。
アークエンジェル、聞こえるか？」

「ッ！？ この声は……………！」

いきなり開かれた回線に、マリューは驚く。

回線が開かれた事に、ではない。

回線を通して聞こえてきた声に、だ。

「本艦は、反乱艦である貴艦に対し、即時の無条件降伏を要求する。」

「ナタル……………！」

「艦長！ 敵艦の光学映像が。」

通信士であるミリアリアが声を上げ、モニターにその姿を見せる。

「これは！」

「アークエンジェルと、同型艦……………」

その姿は正に、アークエンジェル大天使をそのままに、漆黒に染め上げられたドミニオン主天使だった。

「お久しぶりです、ラミアス艦長。」

このような形で再会する事となって、残念です。」

次に映し出されたのは、ドミニオンの艦長であるナタルだった。

「アラスカでの事は、自分も聞いています。

……ですが、このまま降伏し、軍上層部ともう1度話を！
及ばずながら、私も弁護致します。」

「ナタル、ありがとう。

でもそれは出来ないわ。」

マリューのはっきりとした否定に、ナタルは目を見開く。

「アラスカの事だけではないの。

私達は、地球軍そのものに疑念があるのよ。
よって、降伏、復隊はありません。」

「ラミアス艦長……。」

「はははっ！ 一体何をするかと思えば……。」

いいですか？ 言って分かれればこの世に戦いはなくなります。
分からないから敵になるんでしょう？」

ドミニオンから伝わってくる演説染みた男の声に、ゼウは内心で舌

打ちする。

実に不愉快な演説だ。

「そして、敵は討たねば。」

「アズラエル理事！」

男の演説に、ドミニオンの艦長であるナタルが声を上げる。

「MS、全機発進。」

不沈艦と名高いアークエンジェル、今日こそ沈めて差し上げましょう。」

その号令を最後に、ドミニオンとの通信が切られる。

「アズラエルって……………」

「ブルーコスモスの盟主だ！」

「キラ・ヤマト、フリーダム、行きます！」

「アスラン・ザラ、ジャスティス、出る！」

「ムウ・ラ・フラガ、ストライク、行くぜ！」

「ディアッカ・エルスマン、バスター、発進する！」

「クリス・パンツァー、アーク、出撃する！」

アークエンジェルから、5機のガンダムが発進するのと同じ時、ドミニオンからもストライクダガーと、オーブで戦ったガンダムが5機、出撃した。

「どうした、サナエ？」

だが、クサナギの発進デッキにいるサナエが、出撃しようとしな

「ブルー……コスモス……。」

コックピット内で呟く彼女の身体は、冷えきったようにカタカタと震えている。

「サナエ！」

「ッ!？」

急に聞こえてきた声に、サナエは飛び上がらんばかり驚く。

モニターを見ると、ゼウの顔が映っていた。

「う、ごめん！」

慌てて謝り、彼女は機体を発進させる。

「サナエ、無理するなよ。」

「うん、大丈夫。」

「ならいい。」

サナエの言葉を信じ、ゼウは通信を切った。

「サナエ・ミツエイ、ショウリユウ、行きます！」

（ただ見送るしか出来ないんだな、俺には……………。
まあ、“その方がいい”か。無闇に触れれば、俺は……………何も

かも壊すかもしれないから……。）」

サナエと、その愛機の背中を見送り、ゼウも出撃に移る。

「ゼウ・ロ・イクシリア、ウラノス、出る！」

宙と同じ黒い機体を駆り、サナエの隣についた。

「オラアッ！　行くぞお！」

オルガの叫びに合わせて、カラミティの肩にある2門のビーム砲、シュラークが火を吹く。

フリーダムとジャスティス目掛けて放たれた砲火は、宙の闇に一瞬だけ鮮やかな光を生む。

「生け捕れっ たってさあ……………」

「どれでもいいの……………」

シュラクをかわした2機の背後に回り込みながら、レイダーを駆るクロトと、フォビドウンのパイロットであるシャニは面倒臭そうに言う。

「あの機体……………！」

クサナギから出撃してきたウラノスを確認し、エステルはカタストロフィーをそちらに向かわせる。

「来た……………！」

私の愛する人が……………来た！」

ホローに乗るイアも、クサナギから出てきたショウリュウ——
——サナエを見つけ、それについて行く。

サナエとゼウの機体が宙域を飛ぶ。

バーニアの光が漆黒の宇宙に煌めく。

それは、敵の機体にも言える。

接近してくる機影を、2人は捉えた。

「あれは……ゼウ、先に行つて！」

通信で届く声に、ゼウは驚愕する。

モニターのサナエの表情はいつも通りで、先ほどのように顔色は悪くない。

「だが……。」

ゼウは少しばかり躊躇した。

「私は大丈夫。

それに、アレは私の敵だから……私しか狙ってこないから。
ゼウ、貴方は行かなきゃいけない。」

「なに？」

サナエは無言で頷く。

その瞳を見て、ゼウは大仰に溜息をついてから通信を切った。

その後、ゼウは——ウラノスは一足先に別の機体へと飛んで行った。

サナエは、眼前の敵を睨む。

まだ距離の余裕を感じて、ヘルメットを外した。

なにも縛られていない髪が舞う。

その髪の毛をポニーテールに縛って、パイロットスーツの胸元を大きく開ける。

黒いインナーが胸をおさえつけていた。

「ふう……息苦しいね。」

やっぱりパイロットスーツってキライ。」

そう言つて、グリップを握り締める。

ショウリュウが二挺のビームライフルを構えた。

敵は依然として迫ってくる。

射線に入ると同時に、トリガーが引かれた。

カスタムされたビームライフルから光が放たれる。

その閃光が敵機を襲うが、その敵機の持つ武装によって歪められた。

ガンダムタイプのその顔と、武装を見て理解する。

「チツ……“邪気”がきた！」

初めはオーブで戦った。

あの機体^{ホロー}がもう一度――あの女がもう一度、立ち塞がる。

だが、敵機であるホローは攻撃してこない。

疑問に思いながら待っていると、敵のガンダムの目が輝いた。

光通信だ。

敵の光通信を見て、指定された番号に通信チャンネルを合わせる。

少しばかりノイズが入るも、モニターが開き、久しい顔が現れた。

表情は変えずとも、サナエは内心で驚愕する。

その瞳は、以前よりずっと狂気を孕んでいるのだ。

「会いたくなかったよ……イア。」

その狂気の瞳をさらしたまま、モニター内の少女、イアが笑う。

自分の知っている彼女とは違っている。

「フフフッ！ 私は会いたかったよ…サナエっ！」

サナエは思わず頭を抱える。

自分を妬み、嫌い。 感覚から言うと、“邪気”そのものだ。

そんな彼女が、変わっていた。

自ら自分に会いたいなどという女ではなかった。

「会いたかった……………？」

「冗談でしょ、あんなに嫌がらせしておいて……………」

憎悪を込めた瞳で、モニター内のイアを睨む。

「そうだよ。」

あの時は貴方のその力に妬み、キライ、恐れた…………でもねっ！
もう違うのっ！」

ホローが突如動きだした。

機体頭部に装備されたツォーンにエネルギーがたまる。

サナエが足でペダルをふみつけた。

シヨウリュウの脚部とバックパックからバーニアが噴出される。

最大速度で上昇してツォーンを避けた。

同時に、両手のビームライフルを撃つが、すべてゲシュマイディッヒパンツァーに歪められる。

「そう！ それでこそ私の愛する人だよ！」
ライバル

シールドが離れて、その中央からプラズマ砲フレスベルグが現れ、そして放たれた。

それは閃光となってシヨウリュウを追う。

宇宙空間を飛んで避ける。

だが、フレスベルグは誘導プラズマ砲。

その名の通り、ビームは湾曲してシヨウリュウを追う。

「ちっ……しっこいつ！」

ビームシールドを展開して、フレスベルグを防ぐ。

だが、その所為で隙が出来た。

ビームシールドを解除した時、既にホローが目の前に移動していた。

「なっ!?!」

「甘いよおっ!?!」

忌々しい声が聞こえた。

だが、サナエは条件反射で対抗策を行う。

機体頭部から、バルカンが放たれる。

それは、僅かながらもホローの動きを鈍らせた。

「っ……これでも、くらえっ!」

ショウリュウのビームライフルを捨てて、二本のビームサーベルを抜いた。

斬りかかる。

だが、そのサーベルはパンツァーで防がれてしまう。

「楽しいよっ!」

その状態で、止まる。

「私はね、貴女の圧倒的な力に心奪われたの！」

パンツァーの下。

空いている部分に蹴りを突き入れる。

ホローの胴体が下がる。

その瞬間、持っていたビームサーベルを二本投げた。

「コーデイナーとナチュラル……そんなつまらない戦いで、貴方は世界をどうするの!？」

その二本のビームサーベルを、ホローは左手に備えられたグラムで弾く。

流れるような動きで、ツォーンとスキュラを同時に放つ。

「世界なんてどうでも良いよお！ 私は貴女がいれば……それで良い！」

それを横に回避して、ビームがすれすれのままホローに向かう。

右手にナックルダガーを持って接近し、振る。

ホローのグラムがついた左腕を切断した。

「エゴだよ、それは！」

「私をもたない時がきてるの！ 貴方ならわかってくれるでしょ！？
その体、その心、その全てが欲しいのっ！！」

「あんたは怖いのよっ！」

胴を蹴って、距離を開ける。

そして、スティングアーの一本を左手で持ち、投げた。

掠っただけだが、それだけで十分だ。

スティングアーに付与されている電撃が、イアに拷問のような電撃を
浴びさせる。

「んあああっ！」

だが、聞こえるのは嬉しそうな悲鳴。

それに、サナエは背筋を凍らせ、機体の動きを止めた。

モニターの中のイアは、激しく息継ぎをしている。

「はあっ、はあっ……………そう、こんなのが好きなのね……………」

そう言うと同時に、イアはグリップを握る。

サナエも同じく切り替えて握った。

「私が連れて帰って、もっと凄いのを教えてあげる!!」

同時に動き出す二機。

遠距離戦に移行した。

「墜ちろ!」

「クッ!」

カストロフィーから繰り出される砲火を、ゼウは全神経を活用して機体を虚空へと駆け抜けさせる。

「当たれ！」

振り返りざまに放った一筋の光は、カラストロフィーの輝き――
――アルミューレ・リュミエールの前に、無惨にも消え去った。

その時、舌打ちしたゼウの脇を、フォビドウンが駆けて行った。

何事かと視線を巡らせると、ケーブルに引っ掛かり、身動きが出来ないクサナギの姿が、その瞳に映った。

まるで、蜘蛛が張り巡らせた巣窟に捕まった餌のようだった。

「くそっ！」

助けに行こうとウラノスを動かすが、その進路をカラストロフィーの火線が塞ぐ。

だが、その2人の間を、赤い閃光が走った。

ジャステイス――アスランだ。

「アイツッ！」

フォビドウンの追撃をさせまいと、カラストロフィーがライフルの引き鉄を幾度となく引くが、その砲火はジャステイスが僅かに身体

を動かただけでかわされた。

「この！……ッ！？」

苛立つ彼女だったが、コックピットに鳴り響くアラートに、冷静になる。

機体を捻り、今いる場所から急いで離れる。

その刹那、数瞬前まで自分がいた虚空を、ウラノスのスキュラが薙いだ。

「ユカ、切れるか！？」

キサカの焦りを滲ませた確認に、ユカは間髪入れずに答えた。

「はい、大丈夫です。……ッ！」

そう答えた瞬間、ユカはその場から離れる。

彼女が駆る機体――ストライクトウルースの頭上を、フォビ
ドゥンのレールガンが通り過ぎて行く。

「消えな。」

シャニはクサナギに向かって二ーズヘグを振り下ろそうとする。

「させないっ！」

だが、それよりも早く、ユカのストライクトウルースが、背中にあ
る4つのガンバレルを全て解き放つ。

「クッ！」

ゲシュマイディッヒパンツァーを展開し、息を吐く暇を与えさせぬ
ように繰り出されるビームの雨を防ぐ。

「クサナギから離されてる！？」

僅かな間の攻防によって、ユカはクサナギから少しずつ離される。

その隙を狙って、フォビドウンのフレスベルグが、ゲシュマイディッヒパンツァーを介して歪曲し、死角から襲いかかってきた。

「あ……………」

回避行動を――そう思った時には、直撃すると感じた。

だが、間一髪の所でジャステイスが割って入り、ビームを防いだ。

アスランは、盾を退けると同時に、ビームライフルの引き金を引く。

「はんっ！」

シャニは迫る砲火を見て、慌てる事なくゲシュマイディッヒパンツァーを展開する。

だが、いつまで経ってもビームは止まない。

それを不審に思った時、フォビドウンにビームを連射し続けながら突進していたファトウムが思い切りぶつかった。

「クウ！ 邪魔すんなよ！」

こんな戦い（楽しい事）を邪魔され、シャニは熱り立つ。

フォビドゥンをジャスティスに向かわせると、迎え撃つ気があるのか、ビームサーベルの柄と柄とを連結させた。

（落としてやる！）

ジャスティスを睨み、ニーズヘグを振りかぶった。

「ウラアッ！」

一方、コロニー・メンデルの港とは反対側――

そこには、ナスカ級の艦が3隻待機していた。

その内の1隻、ヴェサリウスの艦橋ではラウとアデス、イザークがブリーフィングを行っていた。

「私とイザークで、コロニー内部から情報を集める。」

「隊長自らがですか？」

ラウの進言に、アデスは驚いた。

「ヘルダーリンとホイジンガーはここを動くなよ?」

命令を下してから、ラウは席を立った。

「コロニー・メンデル……」。

上手く立ち回れば色々な事に片が付く。

いいな?」

「ハッ!」

「ッ! この感じは……!」

何かを感じ取ったムウは、迫っていたストライクダガーをアグニで屠り、機体をコロニー・メンデルの港へと走らせる。

「おい、おっさん!」

「おっさんじゃない！ 近くにザフトがいる！」

「えっ！？」

ムウの確信めいた言葉に、ディアッカは目を見開く。

「ディアッカ、ここは俺がやる。」

逡巡するディアッカに、クリスがガンランチャーで敵を離させながら叫ぶ。

「けど………！」

「ストライクダガーも残り少ない。
俺だけで平気だ。」

「……悪い、頼む！」

クリスに背を押される形で、ディアッカはムウの後を追った。

「ッ！ 今のは……………！」

ムウと同じように、ゼウは奇妙な感覚に捕らわれた。

「ラウ・ル・クルーゼか！」

周囲を見回すが、あるのはただの虚空だけ。

ラウを見つける事は出来なかった。

彼と初めて出会った時に感じたこの感覚は、あまり好きではなかった。

「ッ！」

ラウの感覚に支配された一瞬の隙を狙い、カタストロフィーがライフルを連射してきた。

咄嗟に撃ち返そうと、ゼウもライフルを構え、引き鉄を引こうとするが、カタストロフィーが放ったビームが先に、ウラノスのライフルを撃ち抜いた。

「チイツ！」

右肩に備えられた剣の柄を引き抜き、ペダルを思い切り踏み込む。

一気にカタストロフィーに肉薄し、躊躇せずに振るわれた刃は、僅かに飛び退いただけでかわされる。

「お前は…… お前達は、どうしてこんな事をする！」

ゼウは思わず、通信の回線を開いてカタストロフィーに向かって叫んだ。

「その声………ゼウ？」

「え………？」

まさか……… エステル！？」

スピーカー越しに聞こえてきた声は、ゼウに懐かしさと驚きを同等に与える。

まざまざと甦る、あの時——

「本当に、ゼウ・ロ・イクシリアなの？」

「エステル……………」。
エステル・レフラクタ……………！」

「ドミニオンは！？」

同刻。

イーゲルシュテルンで弾幕を張りながら、周囲を索敵するマリュー
は、サイに訊ねる。

「デブリが多過ぎて……………！」

デブリの多いこの宙域には、テザー用のメタポリマーstringな
どの危険な物も存在している。

そんな中で、デブリに身を潜めているドミニオンを見つけ出すのは
難しかった。

「ッ！ ブルー19、αにドミニオン！」

「いつの間に!?!」

「ゴットフリート、てえ!」

「回避!」

「ええい!」

ドミニオンから放たれた4つの光芒は、まっすぐに飛来し、アークエンジェルの側面を通り抜ける。

だが、回避行動を取ったのも束の間、ドミニオンが予め放っていたミサイルが、アークエンジェルへと急速に迫った。

「アークエンジェルが!」

ミサイルの迎撃に間に合わない事に気がついたキラは、フリーダム背部にあるバラエーナでそれらを撃ち落とそうとする。

しかし、その火線に当たらずに済んだミサイルは、アークエンジェルの右舷のゴットフリートを破壊した。

「ナタルさん!」

「あれを鹵獲すればいいんですね?」

ドミニオンに接近してくる白を基調としたMS――フリーダムを一瞥し、ナタルはオルガとクロトを呼ぶ。

「バリエント、ゴットフリート、照準……敵MS！ てえ！」

「クッ！」

迫りくる死の光芒を、既の所でシールドで防ぎ、フリーダムは射線から離れる。

だが、それに安堵の息を漏らす暇もなく、コックピットにアラートが響き渡る。

視線をそちらに巡らせた時には、既にレイダーのミョルニルが放たれていた。

「くっそお！」

紙一重でそれをかわしたと思ったら、今度は背後の衝撃が走った。
カラミティだ。

「今度こそ貰うぜえ！」

「そらあ！ 滅殺！」

不安定になっているフリーダムに、休む間もなくクロトが追い打ちをかける。

撃ち続けられる超高初速防盾砲を、機体を回転させながらかわし、真上から振り下ろされるミヨルニルもギリギリでかわす。

そうして改めて体勢を立て直すも、ドミニオンとカラミティからの砲撃がそれを許さなかった。

「スレッジハンマー、照準、敵MS。 てえ！」

ドミニオンの左舷後部にあるミサイル発射管から、スレッジハンマーが数多くフリーダム目掛けて飛来した。

「ッ！」

それを目前にして、キラの身体の奥底で何かが弾けた。

キラは素早く、ミサイルの全てをマルチロックオンで捉え、バラエーナとクスイフィアスレールガンで叩き落とす。

「はぁー！」

背後から迫っていたレイダーは、フリーダム目掛けて再度ミョルニルを撃ちだす。

それは回避が間に合わなかったフリーダムの背後に盛大にヒットする。

「ボデイが残ってりゃあいんだろお!？」

フリーダムを捕まえるのは自分だ。

こんな楽しい事を、クロト達に取られて堪るか！

オルガはその一心で、引き鉄を引く。

「キラ！」

レイダーとカラミティの2機に翻弄されている友人の姿に、アスランは次第に焦りを覚える。

その焦りが機体の反応を鈍らせ、相手をしていたフォビドウンがフ

レスベルグを歪曲させてジャスティスを狙う。

それを既の所でかわし、お返しとばかりに、アスランはビームブーメランを投げる。

「クッ!？」

シャニは突然の事に驚き、ニースヘグでそれを捌き切れず、ゲシュマイディッヒパンツァーが傷つく。

「クウウ!？」

それだけに収まらず、アスランはビームサーベルで大きく湾曲した斧を叩き切り、更にフォビドウンの胴体を蹴って、自分はフリーダムのある方向へ、フォビドゥンは後ろの方へと大きく蹴り飛ばされた。

「退けえ！ クロト！」

「チィ……………ぶっ壊して怒られても知らねえぞ！」

「…っの野郎！」

フリーダムを撃とうにも、レイダーが射線軸上に入って目障りだ。

オルガはクロトを退かせようとするが、返ってきた言葉に舌打ちする。

確かに、火力ばかりを追求したこの機体では、誤ってフリーダムを撃墜してしまう可能性もある。

（だったら、ジャステイス（あの赤い奴）か、ウラノス（黒い奴）をやっちゃあい！）

が、しかし、オルガは敵を殺す事に快感を覚えている。

1匹ぐらい敵が死んだところで、構いはしなかった。

「これでえ！」

一瞬だけ隙を見せた白い奴に、フリーダムカラミティのスキュラが迫った。

（当たる！）

そう思った刹那、赤い影がフリーダムとスキュラの間に割って入った。

「なっ!？」

その正体がジャステイスだと気がついた時、自分の攻撃が盾で防がれている事も理解した。

そして有ろう事が、ジャステイスはシールドでスキュラを防いだまま、カラミティに向かって突っ込んできた。

シールドとスキュラの銃口が重なった瞬間、爆発が起こる。

「チイツ！」

あのシールドぐらい撃ち抜けよ、このバカモビルスーツ！」

苛立ちながらも、オルガは邪魔してきたジャステイスを睨んだ。

その頃、メンデル内部へと足を進めたストライクとバスター、そしてザフトの最新鋭MSであるゲイツとデュエルは、間もなく邂逅しようとしていた。

「来るぞ!」

「ッ!」

ラウとムウの忠告に、イザークとディアッカは一気に緊張する。

そして、互いのモニターに映し出された機体に目を疑った。

「ストライク……バスター!？」

「デュエル……!？」

相手が誰かを確認する前に、ラウが搭乗するゲイツがライフルの引き鉄を引く。

「ほう……」。

今度は貴様がソレのパイロットか、ムウ・ラ・フラガ!

「新型か……!」

この装備じゃあ……。」「

真っ直ぐに向かってくる一条の光を、機体を捻る事でかわし、反撃にアグニを撃つ。

だが、やはり簡単には当たらず、ラウはそれを余裕で回避する。

「貴様……………よくもディアツカの機体でえ！」

ビームサーベルを引き抜き、イザークはバスターへと肉薄する。

「このナチュラルがああ！」

「お前！ お前！ お前ええ！」

オルガとクロトで、フリーダムとジャスティスを狙い続けていると、怒りに任せてシャニが合流する。

執拗にフレスベルグを歪曲させ、ジャスティスを――引いては目に移る物全てに出鱈目に撃っていく。

だが、フォビドゥンを近付けさせまいと、フリーダムがビームサーベルを引き抜いて追い払う。

「この……ウグウ!？」

追撃を避け、距離を取ったシャニだったが、急に息苦しくなってくる。

薬――Vグリフェプタンの有効時間が切れてきたのだ。

それを感じた時、ドミノオンから撤退の信号弾が撃たれる。

「ちつきしよー!

もう時間切れかよ!」

「…みたいだね!」

苛立つオルガに答えたクロトの息も、かなり苦しそうだった。

しかし、そんな2人とは違って、シャニには戻る気にはなれなかった。

「アイツはあ!」

時間切れになろうとも、もう構わない。

ただ、あの赤い奴ジャステイスさえ墜とせれば！

命令を無視して、シャニはフォビドゥンを駆る。

だが、そんな彼の眼前を、2対のビームが駆けた。

オルガがカラミティのシュラークを放ったのだ。

「撤退命令だ、バーカ！」

「でも……でもアイツ！」

「今は退くんだよ！」

また苦しい思いをしたいのか！？」

「ッ！」

同じ苦しみを持つ者だからこそ分かる、オルガの訴えに、シャニは先行したレイダーとカラミティの後に続き、撤退した。

「撤退命令！？」

「エステル！」

「ッ！」

ドミニオンからの信号弾を目にしたエステルは、カタストロフィーの進路を母艦へと向ける。

「待ってくれ！」

どうして君が、地球軍にいる！？」

「それは……………」

ギリと奥歯をかみしめ、エステルは己が内に秘めている、コーディネイターへの憎しみを吐きたかった。

だが、彼とて————ゼウとて半分はコーディネイターなのだ。

そんな彼に、憎しみを吐いた所でどうなる？

「うめん……………」

それだけ言って、エステルは通信を切ってからドミニオンへと飛翔した。

ゼウが追ってこない事に、感謝を抱きながら……………。

「ほらほら！ ダルマにしてあげる！」

シヨウリュウの腕や足を狙って放たれるエクツァーン。

連射されるが、それらを避けながらサナエは、グリップ先のトリガーを引く。

シヨウリュウがステインガーを投げる。

だが、今回は飛んで避けられるが、その隙に近づいてナックルダガーで切り裂こうとしたが、パンツァーが展開され防御される。

「強い！ 強いよサナエ……………」。

機体性能はこっちが圧倒的に上なのに！！ ここまでやるなんてさあつ！」

「パイロットの良し悪しじゃない!?!」

笑って、グリップを押し込むが、形勢はかわらない。

「そう！ そのコーディネイターすら圧倒する能力……私はそれに惹きこまれたの！

この気持ちは、まさしく愛よ！」

「あ、あい！？」

コックピット内の、サナエが驚愕し、止まる。

モニター内のイアは楽しそうで、嬉しそうだ。

「そう！ 私はあの時から、私は貴女を愛していたのよ……さあつ！ 私と共に行きましょう！！」

「今更何を！ じゃあ“あの時”に私にもう少し優しくしてくれたらよかったじゃない！ そしたら！ もしかしたら！ 私はっ！！」

「まだ遅くないわ！ 一緒に行きましょう！

ブルーコスモスにも渡さないっ！ 貴女はっ！ 私だけのものだからっ！」

2人だけの会話という名の空間。

一歩間違えば命は宇宙を彷徨う事になる。

そんな状況下で、二人は会話をくりひろげていた。

「ブルー…コスモスっ……………!？」

動きが、鈍った。

『ブルーコスモス』という言葉だけで、あの頃を思い出す。

監禁。蹂躪。陵辱。解放。監禁。蹂躪。陵辱。陵辱。陵辱。陵辱。

その繰り返しだったあの頃。

苦しくて——死にたくて、だけどそれすらも許されない。

「あの時とは違う! あの時とは違う! 私が、私が私だけのものにして!

あの時と同じようにはしないわ!—」

「そ、そんな事言っても……………なんのエキスキューズにもならないよっ!—」

ショウリュウの足が、ホローを蹴って吹き飛ばす。

コックピット内で、自分の体を抱いて震えるサナエ。

戦闘中なら動けていたはずだ。

しかし、今回は特別だった。

何故なら、“あの頃”の事を思い出す人物が目の前にいるから。

それだけでいつもの何倍もの恐怖に襲われる。

「に、逃げなきゃ……………」！

震える体で機体を操縦。

高速でコロニー・メンデルへと向かっていく。

その後ろ姿を見て、イアが少し表情を変えた。

通信も切れている。

「ああっ！！ サナエッ！！」

追っていく。

そして二人の戦いはコロニー・メンデルへ。

「はぁ……………」

クサナギの定位置にウラノスを着艦させ、ゼウはヘルメットを取る。
長いプラチナブロンドの髪が揺れ、彼の疲労困憊した瞳が見え隠れする。

「エステル……………」

エステル・レフラクタ。

幼少期の頃に、少しの間だけ遊んだ女の子。

それが彼女だった。

だが、自分がヘリオポリスに移住してからは、会っていない。

会いに行こうにも、そう簡単に会いに行ける所では無いのだ。

それは叶わず、今先程、彼女の声を聞くまでは忘れていた。

（どうして君が、地球軍に……………？）

理由は分からないが、ナチュラルであるエステルが地球軍にいてもおかしくはない。

それでも、軍人とは似つかわしくないほどに優しい少女だった。

初めて、自分がコーディネイターとナチュラルのハーフだと打ち明けられた人物でもある。

「俺は、君を撃ちたくない……………」

コックピットから外には出ずに、そのまま補給と整備を受ける。

キラは、ムウとディアッカ、そしてサナエを探しにメンデル内部へと向かった。

残された自分達は、再び進軍してくるであろうドミニオンへの対抗グループだ。

「エステル……………」

悪いが俺は、君を仲間にしたい。

例えば君が、拒もうとも……………」

身勝手だと言う事は分かっているが、それでも、彼女を撃つてしまふよりはずっと増しだった。

会ってそれほどの仲では無いが、だからと言って、撃っていい人では無い。」

「今度失敗したらまた怒られる？」

「まったく、いい様に使ってくれるよねえ、あのオッサン。」

「しょうがねえ。」

殺されるよりは殺した方が増しってね。」

「X131カラミティ、APE分離確認。
進路クリアー、カラミティ発進よろし。」

指示に従い、カラミティが先行する。

「続いて、X252前進せよ。」

右舷のカタパルトでカラミティが発進した後、フォビドゥンが前進する。

「進路クリアー、レイダー発進よろし。」

そして、左舷のカタパルトからは、レイダーが発進した。

その機影を見送り、エステルはカストロフィーを前進させる。

（ゼウ……。

私はどうしたらいいの？）

ゼウ・ロ・イクシリア。

彼は、コーディネイターとナチュラルのハーフだ。

（私は、コーディネイターを殲滅する為に教育された……。

だけど、ゼウはコーディネイターであり、コーディネイターじゃない。）

エステルは、ゼウがヘリオポリスに移住してから数日後、テロによって両親を失った。

引き取り手がいなかった彼女は、ブルーコスモスが運営するファントムペイン養成所に引き取られ、そこで徹底的にコーディネイターを殲滅する兵士として育て上げられた。

つまり彼女は、コーディネイターに対して相当の憎しみを持っているのだ。

頭を振って、エステルは眼前に広がる宇宙の虚空を見る。

（ゼウ、貴方に聞きたい事があるの。

それで、貴方を撃つかどうかを決める！）

「X157、カタストロフィー、発進どうぞ。」

「エステル・レフラクタ、カタストロフィー、行きます！」

ドミニオンから飛び出し、エステルは漆黒の海にその身を躍らせた。

「ゼウ、出られるか？」

「ああ。」

カガリからの確認に、ゼウはすぐさま頷く。

「さっき改修が終了したRSアストレイも出るけど、サナエがまだ帰ってないから、例の機体の相手は気をつけてくれよ。」

「ああ、了解した。」

機体を動かす手が、一瞬だけ止まった。

『サナエがまだ帰ってない』——

それは、ムウとディアツカ、更にキラまでもが戻ってきていない事を指していた。

（今は……………エステル的事だけを考えよう。）

ヘルメットをかぶり直し、キツと目を開く。

「ゼウ・ロ・イクシリア、ウラノス、出る!」

先行したジャスティスの隣に着き、ゼウはカタストロフィーだけをモニターに映す。

（エステル……………。）

グリップを握る手が、少しだけ強張った。

サナエがメンデル内部に機体を入れると、遠くにフリーダムとストライクが見えた。

ここの内部に入り込めばおそらくは、と思ったが。

「キラとっ……ムウさんがいれば……」。

呟いたサナエだが、少し離れた場所にデュエルとバスターが見えた。さらに遠くには、頭部と脚部を失った、見慣れぬ機体が転がっていた。

恐らくは、ザフトの新型機だろう。

舌打ちをして、フリーダムから少し離れた場所に機体を着地させた。コックピットを開いて、そこから這うように出る。

震える足でなんとか立つ。

それだけの動作で十分近くの時間を要した気がした。

「……しつかり…しな、さいよっ!!」

自分の足を殴って、なんとか震えを止める。

立ち上がって、建物へと向かおうと走り出した瞬間、銃声と共に足元に銃弾がぶつかる。

放たれた場所を見ると、そこには拳銃を向けるイアが立っていた。

生身で会うのは何年振りだろうか？

彼女もまた、サナエと同様にヘルメットを外している。

「ああっ、久しぶりだあっ…やつぱり変わってない……。」

その瑞々しい肌も、綺麗な髪も、大きな胸も…むっちりとした太股も………ああっ！ そのすべてが欲しいいっ!!」

その目と言葉に、サナエは顔が青ざめた。

自分は今、確実に欲望の的だ。

背筋が冷たく感じる。

死神が近づいてきている感覚が良くわかった。

「あつ、大丈夫っ……しっかり連れて行つてあげる……………」。
貴女の仲間も全員……首だけになっちゃうかもしれないけどね？」

その瞬間、サナエが震えた手でイアに銃を向ける。

だが引き金を引く前に、イアの方が早く引き金を引いた。

弾丸は拳銃に当たって、サナエの手から拳銃を弾き飛ばす。

「うあつ！」

いつもならそんなヘマはしなかった。

もっと良くできている。

なのに、今回はなぜこんな風になったか……………もちろんトラウマの
所為であるっ。

「アハハハッ！ 昔はあんなにあっさり、戦闘訓練じゃあしらわれたのにつ！」

飛びかかってくるイアに、体勢を崩すサナエ。

サナエの上に馬乗りになると、目一杯右腕を引いて、サナエの左肩を殴った。

硬い音が響く。

「ぐうつつ!？」

「肩が外れただけだから平気だよっ！　一緒においで！　私が治してあげるからっ！」

そう言いながら、サナエのパイロットスーツの胸元を掴んでさらにあける。

黒いインナーに手をかけるが、そこでサナエがイアに頭突きを放った。

「あううつ！」

頭を押さえてサナエから離れる。

外れた肩を押さえながら、立ち上がって、サナエは走っていく。

「待って、私のっ…ッ!？」

走って追おうとしたが、腕につけている端末か何かが鳴り響いた。

それはなにかを示す合図。

そう、薬が切れる。

生死がかかる問題だ。

だが、まだ余裕がある。

ならば愛した彼女を追う。

それ以外に、考えることは無い。

「サナエっ！」

まだ彼女の背中は見えている。

走れば余裕で追いつく距離だ。

「サナエッ！」

叫び、走ろうとした瞬間、銃声が轟いた。

足元に弾丸が走った。

サナエの元に駆け寄る二人の男。

「…誰？」

イアは、苦々しく呟いた。

サナエが、その2人の顔を見て、驚くと同時に安堵を息を吐いた。

2人はイアを見ている。

「キラ……ムウさん……。」

キラが、銃口をイアに向けていた。

ムウとキラが現れて、再びカタカタと震えだすサナエ。

その震えが示すのは、安堵。

「おい、お嬢！」

ムウは腹部に怪我をしているようだが、空いた片手でサナエの肩をゆする。

無理矢理笑顔を作って、大丈夫と頷いた。

「……たく、なにされたんだ？」

「あの子とは、いろいろあつてね」

そう言っただけだと、キラがサナエの背中をさする。

アークエンジェルに乗り込んだ当初から仲間だっただけあって、
2
人との絆は強い。

親友と言っても過言では無いだろう。

だが、その親密さがイアの胸に怒りの炎に火を灯した。

「貴様あつ！ 私のサナエに勝手に触れるなあつ！！」

走りだそうとしたが、キラがイアの足元を撃った。

一瞬で思考が冷却されて止まる。

「次は撃ちます！ 下がってください！」

人を一人も殺したくない。

彼なりの言葉。

それを理解したのかしていないのかはわからないが、イアは下がっていった。

それによって、キラが銃をしまった。

立ち上がるサナエ。

ムウとキラが気遣うが、大丈夫と言って平静を装おうとする。

無理をしているとわかっていた。

「行こう、このままじゃやられる!」

その言葉に頷いて、ムウとキラが自分の機体に取り込む。

同じくサナエも乗り込むと、外れた左肩に右手を当てる。

「んっ……ぐっ……ああっ!!」

ゴギンと音を鳴らして、左肩が治る。

未だに痛みが残るが、左手を使ってグリップを握る。

「戦線復帰と行きますかっ!」

額の汗を拭って、精一杯にいつものテンションで言う。

フリーダムとストライクを追って外へと出た。

コロニーから出ると同時に、戦線へと飛ぶ。

ブーステッドマンたちの戦闘場所と少し違う、コロニー近くを飛行していると、ホローが現れた。

通信を開く。

画面内の彼女は心配そうな顔をしている。

「大丈夫っ？ なにもされなかった!？」

そんな事を言う彼女が、許せなかった。

よくもぬけぬけとそんな台詞がいったものだ。

イアの方から自分の肩を外してきたのにも関わらず。

「大丈夫よ、“貴女よりは何もしない”。」

わざとらしくイアを否定するように言うが、イア自身はそれをまったく気にしない。

「そっかぁ。」

でも、私のところにきたらいろいろしてあげるよ?」

「してほしくないよ!」

フットペダルを押し込んで、バーニアをふかす。

ショウリュウが高速でホローへと飛ぶ。

「そう!　きてっ!」

ツォーンとスキュラが同時に放たれた。

その2つを避けて、ホローに近づく。

「同じ手は通じない!」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ!」

フレスベルグが放たれた。

その弾道はシヨウリユウを的確に追ってくる。

しかし、その原理はなんとなく理解した。

腰横から、ビームシールド発生装置を取り出し、ホローに投げる。

「なにっ、コレでどうするの？ こんなことより、私と遊ぼうよっ
っ」

モニター内で笑顔になる彼女。

その笑顔に背筋を凍らせながらも、サナエはシヨウリユウのグリッ
プを操作する。

クナイが投げられた。

しかし、その標的はホローでなくビームシールド。

小さな物体を機体の投光で当てる技術。

並みのコーディネイターでもできないような芸当だ。

そして、クナイが当たった瞬間、ビームシールド発生装置がシヨ
トを起こして爆発した。

「きゃっ！？ 凄い……さすが、私の愛した人！

あぁっ、サナエっ………サナエッ！ 貴女が欲しいッ！！」

「怖いよっ、貴女はっ………そんな生の感情を丸出しでっ、私には貴女が宇宙を乱す者に感じられる！」

「違うよっ、私が乱したいのはサナエだけっ！」

その言葉に、さらに背筋が凍るような感覚がした。

「私だけが乱す！ 監禁して調教して飼って手なずけて遊ぶの！！」

その言葉に、一瞬でブルーコスモスを連想してしまう。

カタカタと震えだして、呼吸が荒くなる。

自分でもどうにかしなくてはと焦るのに、手が動かない。

「アハハッ！ ようやく私の者になる気が………っがああぁっ！？」

突如頭をおさえて苦しみ出すイア。

その姿を見て、サナエは震えながらも操縦桿を握ってアークエンジンエルへと飛ぶ。

通信を切って、バーニアを最大にしてクサナギへと向かっている最中、3機のM1アストレイがショウリユウの周りに集った。

モニターが開いて、3人の少女が写った。

「あ、あさぎっ……まゆら、じゅりっ……………」

「お姉様っ！　どうしたの!？」

マユラが叫ぶ。

サナエは必死で笑顔を見せて頷く。

全員心配そうな顔をしていていた。

それに安堵の息を吐きながらも、自分の体を抱いたまま伝える。

「ご、めん……クサナギまで、引っ張って……………」

その言葉に、アストレイ3機がショウリユウをクサナギへと運んでいった。

クサナギ内部。

デッキに立っているショウリユウ。

そのコックピットの中で、サナエが体を抱えていた。

戦闘が終わった途端、今日のことを振り返って、恐怖が何十にもな
って襲ってきた。

ブルーコスモス。ブルーコスモス。ブルーコスモス。

恐怖の対象として心に根強く植えられた『種』と言っても過言では
無い。

「ひっ……い、やだっ……いやだっ！」

体を小さくまるめている。

いつも気丈で頭が回り、冷静なサナエが瞳一杯に涙を溜めていた。

「やだっ……だれ、かつ……。」

ひたすら、自分の身を抱えて、助けを求め呟いていた。

彼女にはそれしかできない。

「ゼウ！」

互いに機体を1度だけ交錯させ、背後に回ったウラノスに向けて、エステルは通信を開く。

「エステル……………」

互いに相手の名を呼んだだけで、以降の会話は途切れてしまった。

言いたい事はたくさんあるのに……………」

話したい事はたくさんあるのに……………」

何を話せば……………」どう行動すればいいのか。

それが、2人にはまったく分からなかった。

「エステル。君は何故、地球軍に身を置いているんだ？」

数分——否、もしかしたら数十分経過したのかもしれない。

長い間、ただ対峙していた所為か、時の感覚が狂ってしまった。

「私は、貴方がヘリオポリスに移住した後、テロで両親を失ったの。」

ゼウが息を呑んだ気配がした。

「身寄りのなかった私は、地球軍に引き取られて、そこで対コーディネイターの兵士としての教育を受けさせられた……………」
つまり、今の私はコーディネイターを殲滅する為の兵士よ。」

そこまで一気に話して、エステルは深く息を吐く。

しかし、ゼウは何も言ってこなかった。

「エステル……………君は俺を……………」

「撃つわ。」

ゼウの問いかけに、エステルは迷いを感じさせぬ声色ではっきりと言った。

「貴方は、コーディネイターの味方だから、尚更。」

「エステル！ 君は本当にそれでいいのか！？」

コーディネイターを殲滅して、この戦いが終わるのか？」

「終わるわ！

敵であるコーディネイターを、全て滅ぼせばね！」

「ッ……………本気……………なのか？」

「ええ。

コーディネイター全てが、人類に対する脅威なのよ。

“当たり前”でしょ？」

「なら……………なら俺はどうなんだ？」

「ッ！？」

「俺は……………ナチュラルとコーディネイターのハーフだ。

コーディネイターとしての血が流れているから、俺も敵なのか？」

「……………それは……………」

それは、エステル自身も考えていた。

彼は——ゼウは一体誰なのだろうか？

ナチュラル？

それとも、コーディネイター？

分からなかった。

「確かに俺は、コーディネイターなのかもしれない。けど、俺はコーディネイターとしての遺伝子治療を受けてはいない。」

コーディネイターの定義が、遺伝子治療を受けた者なら、俺はコーディネイターじゃない。」

静かに語りだすゼウの背後に、撃墜されたストライクダガーが煙を上げて遠ざかり……やがて爆散した。

「だが俺は……俺をナチュラルだとは主張しない。」

「え………？」

「俺は“ナチュラルでも、コーディネイターでもない”。……俺は、ゼウ・ロ・イクシリアという人間だ。」

「ゼウ………。」

「エステル。」

戦争はもともと、“ナチュラルとコーディネイターが始めたものじゃない”。

“人間同士が始めたもの”だ。」

「人間………同士………。」

「コーディネイターを殲滅した所で、人間の溝は埋まらない。誰だって望むだろう？ 強い力を、他者を凌ぐ才能を。」

ゼウの言う通り、誰だって弱いのは嫌だ。

強くなりたい……………。

才能を持ちたい……………。

そう思うだろう。

「他者より強く、他者より先へ、他者より上へ……………」。

人の世界はいつもそれを競い、敗れば妬み、果ては憎む。……………って、“アイツ”が言っていた通りだ。」

「アイツ……………？」

エステルが首を傾げて訊ねるが、ゼウはそれには答えなかった。

「それは、ナチュラルとコーディネイターだから生まれる図式じゃない。
“人と人だからこそ”、この図式に捕らわれる。

人は2人いれば、必ず優劣がつく。それを妬んで、より強い者を……………才能のある者を、結局人はまた生み出す。」

「なら、ナチュラルが殲滅されればいいと？」

「そんな事言って無い。」

それに、コーディネイターなら優劣がつかない訳でも無い。
結局、誰かは誰かを妬むんだよ。」

「じゃあ、どうすればいいって言つの!？」

「“どうもしなくていい”。」

「え……………?」

「“何もしなくていい”んだよ。」

優劣がつくのは当たり前だっと思えばいいのさ。

それに、他者よりも自分が勝っている部分は必ずある。」

「それを見つけれないから、私は……………私達ナチュラルは!」

「それは見つけれないんじゃない。」

見つけようとしていないだけだ。」

「見つけようとしな……………?」

「エステルがコーディネイターよりも勝っている所、俺は知ってる。
優しい所、面倒見がいい所、どんな人でも、受け入れてくれる所
……………」

一緒にいた時間は短いけどさ、俺はエステルのそういう所を知
てるよ。」

「あ……………」

「エステル、俺と一緒に来い。

コーディネイターを殲滅してほしくないって事もあるけど、本心は君を戦場にいさせたくないんだ。」

「でも……でも私は、コーディネイターを！」

「なら、一緒にコーディネイターを“なくしていけばいい”。」

「どういう事？」

「コーディネイターなんて、“どこにもいない”。

いるのは人間と人間だけ……って事さ。

一緒に見直していけばいいんだよ、人間って生き物を。」

「ゼウ……。」

ゼウの——ウラノスの手が、エステルに——カタストロフィーに伸ばされた。

「迷うのなら一緒に来い！

そして一緒に考えればいい。」

「……ゼウ、1つだけ教えて。」

「何だ？」

「貴方は……ナチュラルとコーディネイター、どちらの味方なの？」

「……俺は……。」

エステルの問いに、ゼウはしばし黙りこむ。

が、やがて口を開いた。

「俺は、ナチュラルの味方でも、コーディネートターの味方でも無い。
エステル……俺は君の味方だ。」

（後書き）

機体、及びパイロットの設定

―三隻同盟軍―

パイロット

ゼウ・ロ・イクシリア

17歳で、ナチュラルとコーディネイターのハーフという奇異な存在。

ウェーブのかかった金髪で、碧眼。

その正体は、アル・ダ・フラガとコーディネイターの女の間に儲けた子供。

地球連合軍が、『エンデュミオンの鷹』として名高いムウ・ラ・フラガの高いガンバレル操作技術に目をつけ、彼の父であるアル・ダ・フラガの遺された遺伝子と、当時協力者であったコーディネイターの女性と掛け合わせ、ゼウが誕生した。

しかし、コーディネイターの女性がゼウを連れ出して逃走。

その後彼は、幼心のままに中立コロニーであるヘリオポリスでひっそりと暮らす事に。

キラ・ヤマトや彼の友人たちは、ゼウがナチュラルとコーディネイターのハーフである事を知っている。

機体

ZGMF-X14Aウラノス

『ZGMF-X13Aプロヴィデンス』の兄弟機で、『ZGMF-X10Aフリーダム』などと同様に核エンジンを搭載している。

他の3機と違い、ミラーージュコロイドを使役できる。

装備

MMI - GAU2ピクウス76mm近接防御機関砲

『X10Aフリーダム』と『X13 - Aプロヴィデンス』に採用されている機関砲。

胸部に2門装備されている。

MA - M20ルプスビームライフル

『ZGMF - X09Aジャスティス』、並びに『X10Aフリーダム』に採用されたビームライフル。

開発当初は、『ZGMF - X13Aプロヴィデンス』も、『ルプスビームライフル』を採用する予定だったが、『MA - M221ユーディキウムビームライフル』を装備するはずだったウラノスが、「ユーディキウムビームライフルは巨大過ぎて、左右の腰部に装備した大型のドラグーンを前面に展開し辛い」という点から、『ユーディキウムビームライフル』を、兄弟機であるプロヴィデンスに譲渡したと言われている。

MA - MV04A複合兵装防盾システム

『X13Aプロヴィデンス』の左腕に装備されている、『MA - MV05A複合兵装防盾システム』と同系統の装備。

プロヴィデンスとは違い、ビーム砲はなく、大型のビームサーベルのみとなっている。

開発当初は、『X09A』、『X10A』と同様に『MA - M01ラケルタビームサーベル』を肩に装備する予定だったが、背部に配されたジェネレーターからのケーブルが柄の先につけられており、『X09A』、『X10A』の2機に採用されたシールドを装備したままでは「取り回しが辛い」という問題点が浮上し、今現在の『MA - MV04A複合兵装防盾システム』に落ち着いた。

尚、背部ジェネレーターからのケーブルはPS装甲を採用しており、更にそれが切断されても核エンジンを使用している事から稼働には問題が無く、出力が増強できないという点のみが問題となる。

MA-M01Vヴァーチェスラケルタビームサーベル

『MA-M01ラケルタビームサーベル』の改良型で、右肩に装備されている。

背部にあるジェネレーターから供給されるエネルギー量を調節し、ビームサーベルの長さをサーベルから対艦刀サイズにまで自在に変化させる事が出来る。

以降に開発される機体にも用いられるはずが、ジェネレーターの小型化が間に合わず、プロヴィデンスには採用される事が無かった。

余談になるが、C・E・73頃に開発されたセカンドステージシリーズ時には、ジェネレーターを背負う点が問題視され、「対艦刀サイズにする必要が無いのでは？」という声が上がリ、今までのようにサーベル内の範囲で調節できる形式が取られた。

しかし、この調節を好むメカニックも多数おり、後に開発される『ZGMF-X42Sステイニー』の両肩にある『RQM60Fフラッシュエッジ2ビームブーメラン』に、ビームの出力調整機能が採用され、ブーメランとしてだけでは無く、ビームサーベルとしても使用が可能となっている。

580mm複列位相エネルギー砲スキュラ

『GAT-X303イージス』並びに『GAT-X131カラミティ』に採用されていた、胸部に位置している砲。

地球連合軍から奪取した『X303イージス』が、アークエンジェルとの再三の戦闘で幾度となく使用した事と、知将と謳われたハルバートン率いる第8艦隊との戦闘時にも、敵に多大な損害を与えたという2点から、Z・A・F・Tもこれを採用したと思われる。

飛距離と火力を更に増強する為に、背部のジェネレーターから、脇の下を通してケーブルが胸部に繋がれている。

ドラグーンシステム

正式名称『Disconnected Rapid Armament Group Overlook Operation Network System』（分離式統合制御高速機動兵装群ネットワーク・システム）。

量子通信により、ドラグーンを同時に操作し、全周囲に絶対制空圏を構築する攻防一体の兵器である。

『X14Aウラノス』と『X13Aプロヴィデンス』の2機は、量子通信システムを実用段階に発展させた事により、それらを武器に転用した。

『X14Aウラノス』は、背部にある巨大な円形の装備が、ビームジェネレーターと量子通信システムを積んだ物となっており、『X13Aプロヴィデンス』と同じく、機体本体の設計が完了した後にシステムの採用が決定した為、機体とドラグーン・プラットフォームを繋ぐケーブルが脇腹に露出している（無論、それらはPS装甲で覆われている）。

ウラノスの腰の左右に配された2つの円錐形の砲身（大型ドラグーン）は、当初『X-13Aプロヴィデンス』が、背部にある巨大なドラグーン・プラットフォームに取り付け、大型ドラグーンは5つの予定だったのだが、その砲身の大きさから、装着が困難とされ、廃棄が決定される所を、一部のメカニック（恐らくはクライン派と思われる）が『X14Aウラノス』に譲渡した。

この2つの大型ドラグーンは、腰部に接続された専用のドラグーン・プラットフォームを動かす事で、前方に展開し、射撃する事が可能で、重力下で使えないドラグーンの難点を克服したとも言える。この腰部に接続したドラグーンの前方展開という技術は、『X13Aプロヴィデンス』にも採用されており、使われる場面はなかったが、『X14Aウラノス』と同様の使用が行える。

そして、実はこの技術は知らず知らずの内に別の組織にも使われている。

それは、『ライブラリアン』と呼ばれる謎の組織で、そこで秘密裏

に開発された『L N - Z G M F - X 1 3 A ニクスプロヴィデンス』にも用いられている。

ビームジェネレーター兼量子通信システム

『X 1 4 A ウラノス』の背部にある巨大な円形の装備。

これは、『M A - M 0 1 V ヴァーチエスラケルタビームサーベル』、『M A - M V 0 4 A 複合兵装防盾システム』、『5 8 0 m m 複列位相エネルギー砲スキュラ』のビーム出力を上昇させる物となっており、核エンジンを積んでいる点から、エネルギー切れを早期に起こす事もない。

ただし、重量がかなりの物となっている為、先に開発が済んだ『X - 0 9 A』と『X 1 0 A』よりも機動性はやや劣る。
それでも、単機で重力下でも飛行が可能となっている。

その他

ミラージュコロイド

機体を、電子上は元より、光学的にも不可視の状態にするガス状の物質。

核エンジンを搭載している事から、実質上は仕様に対する制限時間が無い。

この技術は、後にユニウス条約の締結に違反する為、生産は中止となったはずなのだが、地球連合軍は裏で『G A T - S 0 2 R N ダガーN』や『G A T - X 2 0 7 S R ネロブリッツ』など、核エンジンを搭載し、更にはミラージュコロイドも兼ね備えた機体がロールアウトされた。

『X 1 4 A ウラノス』は、ミラージュコロイドを展開中は熱源探知を防ぐべくスラスタを一定以上は使えないが、『スキュラ』や『ルプスビームライフル』を使う事で敵を殲滅する事が可能となっている。

PS装甲

PS装甲を展開すると、黒を基調としたカラーリングになる。ちなみに、『X13Aプロヴィデンス』と同じように全体のほとんどがその色で統一されている。

パイロット

クリス・パンツァー

年齢は23歳で、赤い瞳と白銀の髪をしている。

ジャンク屋組合に所属しており、オーブに拠点を置いているナチュラルの青年。

勝気な性格で、周りに負けたくないという思いから物事に取り組、技術を身につける努力型の人間。

先天性白皮症を患っており、紫外線対策等の問題から夏でも長袖・長ズボンが基本となっており、専用のサングラスを身に着けている。戦争による戦いで関係ない人が傷つくことを嫌っており、ロウ・ギユールの「MSは単なる機械ではなく、人を活かす為の機械である」という言葉に強く共感している。

自主制作の作業用潜水ポットを使用し、主にオーブ付近の海底ジャンクを生活の糧として生活していたが、ある日海底で放棄されていたMS用コンテナを発見し、丁度その頃オーブを訪れていたロウ・ギユールの協力を得てコンテナを回収、格納されていたアークを発見する。

最初はアークをどうするか悩んでいたが、今現在の情勢を考えて故障箇所が見られたアークを修理、レッドフレームからナチュラル用のOSの移植を行って戦闘可能な状態へと仕上げる。

機体

GAT-X103PFアーク

形式番号からも分かるように、『GAT-X103バスター』と関

係の深い機体。

『P F』は、『P r o t o F i g u r e』の略称で、『G A T - P . R . O . T . O .』から『X 1 0 3 バスター』を設計するまでの過程で造られた機体である。

本来は、ロウ・ギールが手に入れる『アストレイ』と同じように、露見を恐れた技術者たちの手で爆破される事になっていたのだが、ロンド・ギナ・サハクの手により、ゴールドフレームと共にオーブに運ばれる。

しかし、ロンド・ギナ以外にこの機体を扱えるパイロットがいない（秘密裏に入手した為、サハク家に関係している者のみにしか確認していない）為、データを入手した後はオーブ近海に廃棄された。

装備

75mm対空自動バルカンシステム・イーゲルシュテルン

戦闘艦艇などにも装備されている標準的な対空防衛機関砲。

『X 1 0 3 P F アーク』は、射撃の精密性を上げる為のセンサーを左側に設置している為、『イーゲルシュテルン』は頭部側面右側のみ設置されている。

90mmマルチガトリングランチャー

バックパックに連結されている二対の大型ガトリング

状況に応じて実弾とエネルギー弾を撃ち分ける事ができるもので、機体の主兵装であるといえる。

（形状や使用時の保持の仕方はF91のヴェスパーをイメージしてください。）

この装備は後に、ロウ・ギールが改修する『M B F - P 0 3 ガンダムアストレイ・ブルーフレーム S e c o n d L』に装備される『タクティカルアームズ』に付けられたガトリングガンの参考にもされている。

170mm肩部10連装ミサイルポット

両肩に装備される縦長のミサイルポット。

使用後はポット自体をパージする事が可能で、デットウェイトとなる事を防止する事ができる。

『GAT-X103バスター』の同系統のミサイルは10連装から6連装に変更されているが、これは威力と連射性、更にはポットのパージをせずに機体の推進力を維持する事が目的とされている。

60mm腕部複合型ビームキャノン

両腕にそれぞれ二門ずつ装備されている牽制用の武装。

牽制用でありながらも中距離までならMSを破壊できる出力を持つ。またキャノン部からビーム刃を形成し、クローのようにして扱う事も出来る。

『X103バスター』から格闘兵装を取り去ったのは、他のGATシリーズとの連携を考慮した結果だと思われる。

その他

PS装甲

フェイズシフト(Phase Shift)装甲とは、一定電圧の電流を流す事で、相転移する特殊な金属でできた装甲の事である。その為、相転移(Phase Transition)と呼ばれる事もある。

相転移した装甲は、一定のエネルギー消費と引き換えに物理的衝撃を無効化する事が出来る。

この金属は、相転移に伴って装甲面の分子配列が変わるといった性質がある為、パーツごとに色彩も変化する。

起動する際に『フェイズシフトを展開する』という言い方をする事もある。

稼働していないPS装甲はおおむね、メタリックグレーで、その状態は『デИАクティブモード』と呼ばれる。

パイロット

ユカ・アマミツ

16歳の女性で、コーディネイター。

目は丸目の黒、髪は栗色で肩までかかるセミロングをしている。

性格は明るく快活。

コロニーで生まれ育ち、その後オーブに移住したオーブ軍人のコーディネイター。

基地を攻撃していたストライクダガー5機と、105ダガーを1機撃破する戦果を上げる。

その後、その才能を買われクサナギに收容されると、宇宙で三隻同盟と共に戦うこととなる。

基本は近く遠距離をそつなくこなすオールラウンダー。

使用するストライカーパックは、空間認識能力の高さからかビーム兵器を積んだガンバレルストライカーが多い。

機体

MBF-03ストライクトゥールス

『MBF-03ストライクトゥールス』は、『MBF-02ストライクルージュ』と同様に、『GAT-X105ストライク』のデータを解析して作り上げたデッドコピーである。

オノゴロ島で地球連合軍の攻撃に遭った際、混乱する基地に保管されていたストライクトゥールスにユカが搭乗し、その後は彼女の機体となる。

装備

ストライカーパック

『エールストライカー』、『ランチャーストライカー』、『ソード

ストライカー』、『ガンバレルストライカー』を任意で選択可能。
(武装は、ガンバレル以外はストライク、ストライクルージュのものをそのまま流用。)

ユカ独自の改良により、ランチャーやソードで本来片方の肩に1つ付いている武装は両肩に装備されており、背部の武装も2つに増量して、バックパックを使用する際は自動で手元に武装がシフトする作りになっている。)

75mm対空自動バルカンシステム・イーゲルシュテルン

戦闘艦艇などにも装備されている標準的な対空防御機関砲。

左右の側頭部に計2門内蔵されており、接近する敵機やミサイルなどを自動的に追尾、迎撃する。

対白兵用突撃ビーム銃剣・ゼフィール

本来はアーマージュナイダーがマウントされているはずの腰部に2振り標準装備されている実体銃剣。

普通はビーム刃を生やしてビームサーベルとビームライフルの一体型武装として使用するのが常だが、ビーム刃を消去することでアーマージュナイダーと同様、エネルギー枯渇時の非常用武装や実体武装として使用できる。

(ダブルオーライザーのGNソード?を小さくしたようなもの)

『MBF-02ストライクルージュ』に装備される予定だった『I・W・S・P』には、9.1メートル対艦刀が装備されているのは、エネルギー枯渇時の非常用武装という、『ストライクトウルス』の利点を採用したからだと思われる。

その他

強化型PS装甲

クサナギ収容後に、ユカが『ストライクトウルス』の装甲を解析し、ストライクルージュのパワーエクステンダーを発展させ、完成

させた。

通常のPS装甲よりも強度や展開時間が大きく向上している。図らずもその装甲は、後にZ・A・F・T・がセカンドステージシリーズに採用したVPS装甲に近い物となる。

装甲展開時の機体色は、青と空色のツートンに変更されている。ストライクルージュの紅部分が青、本来のストライクで白く、ストライクルージュではんのりピンクの部分が空色にあたる。

パイロット

サナエ・ミツエイ

ナチュラルで23歳の女性。

性格は基本的に明るいが、過去にトラウマがある。

オーブ連合首長国に所属しており、階級は二佐。

髪は雪のような白髪で、腰から少し上ほどまでの長さのポニーテール。

血のような赤い瞳をしており、それをコンプレックスに思っている。仲間であるアサギ・コードウェル、ジュリ・ウー・ニエン、マユラ・ラバツなどからは、胸が大きい事をほぼ毎日指摘されている。（本人曰く、「うつ伏せになる時は大変」との事）

オーブのトダカー佐とは『父と娘』のような間柄。

アスハの家とは仲が良く、アサギ、ジュリ、マユラ・の三人からは尊敬されていて『お姉様』と呼ばれている。

ナチュラルでありながらコーデイナーを凌駕する頭脳と身体能力、機体操縦などで化け物扱いされることにトラウマがある。（ただし、力は強く無い）

しかし、4年前まで連合に所属。

持つ能力から化け物と言われ、ブルーコスモスに実験動物にされた痛みを伴う実験などもあり、いろんな傷をおっては治されて来たが

胸の間にある大きな傷だけが治らなかった。
強制的に辱められたりなどをされたせいでブルーコスモスという言葉
葉をきくと、顔を真つ青にして汗を流す。

機体

ORB - P01 ショウリユウ

『ORB - 01 アカツキ』の姉妹機。

外見は『アストレイゴールドフレーム』に似ているが、色の基本色
は白。そこに金のラインが施されている。

オーブにてウズミから渡され、その後自分で設計した武装を装備。

技術は2、3年後のものまでであったが、全てサナエ自ら開発。

その技術は、武装完成後、全て消去したので残っていない。

装備

75mm対空自動バルカン砲塔システムイーゲルシュテルン

戦闘艦艇などにも装備されている標準的な対空防御機関砲。

『X103PFアーク』は、射撃の精密性を上げる為のセンサーを
左側に設置している為、『イーゲルシュテルン』は頭部側面右側に
のみ設置されている。

71式ビームライフル

『MBF - M1 M1アストレイ』が持っている物と同系統のビー
ムライフル。

しかし、『ORB - P01 ショウリユウ』はこれを2つ装備してい
る。

70式ビームサーベル

『MBF - M1 M1アストレイ』が持っている物と同系統のビー
ムサーベル。

背中に2本装備されている。

以下はサナエが設計した武装

KASNBIMシールド発生装置

通常の物以外に、腰横のホルダーに予備として更に2つある。

機体腕部に装備する三角形のプレートで、そこからビームによるシールドを発生させる。

KASNSTEINGER

クナイ型の実体剣武装。

機体の腰部後ろに、左右3つずつ付けられている。

刺さるか、或いは接触すれば電撃でのスタン効果付き。

KASNNACKUL・ダガー

バックパック横に取り付けられた二つのメリケンサックのような武器。

手に持った後、そこからビームの刃が出てそれを使い切り裂く。

（武装の元ネタは機動戦士ガンダムKATANAで登場した『ストライカー・カスタム』の武装）

—地球連合軍—

パイロット

エステル・レフラクタ

ナチュラルの少女で、17歳。

ゼウと幼少期の頃に知り合い、仲良くなるが、それから日を置かずに彼女の両親がテロで死亡する。

引き取り手がいなかった彼女は、ブルーコスモスが運営するファントムペイン養成所に引き取られ、そこで徹底的にコーディネイター

を殲滅する兵士として育て上げられる。

オーブ侵攻戦の際、上司がブルーコスモスの盟主、ムルタ・アズラエルに頼んだ事により、戦線に加わる。

当時のファントムペイン候補生の中で成績が優秀だったスウェン・カル・バヤンを連れて行くよう進言したが、アズラエルは頑なにそれを拒んだ。

しかし、『テストケースとして連れて行って欲しい』と言われ、渋々それが承諾された。

つまり、戦力の増強が主な目的では無く、あくまでどれほど戦果を上げられるかを見る為だった。

オルガ・サブナックを始めとする生体CPUとは、可もなく不可もなく接している。

宇宙のL4コロニー・メンデル宙域での戦闘の折り、『ZGMF-X13Aウラノス』を駆るパイロットがゼウだと知る。

機体

GAT-X157カタストロフィー

地球連合軍が、対ザフトの切り札として新たに開発したGAT-Xシリーズ。

先に開発された『X103バスター』などの系譜にあたる100系である。

『CAT1-X1/3ハイペリオン』のアルミューレ・リュミエールを採用しており、光波防御シールドを展開できる。

装備

350mmレールバズーカゲイボルグ

『X102デュエル』が持つはずだったバズーカだが、強奪時にはビームライフルを所持していた事から盗まれずにヘリオポリス内部に残されていた。

しかし、それは『MBF-P01アストレイゴルドフレーム』の

物となり、連合の手に渡る事は無かった。

本来は『LR-GAT-X102レーゲンデュエル』が所持しているように、かなり巨大な物だが、取り回しがし辛い点が問題視され、『X131カラムティ』が持つ『トードスブロック』の大きさまで小型化された。

右手に標準装備されているが、使わない時は腰部背面にマウントする。

バズーカの中では威力がかなり高く、発射速度も速い。

予備バッテリーを搭載しており、更に砲弾を内部で電磁加速させ撃ち出す事が出来る。

ある意味リニアキャノンと呼べるもの。

175mmグレネードランチャー装備57mm高エネルギービームライフル

『X102デュエル』の専用装備として開発された物である。

銃身の下部に小型のグレネードランチャーをつけている。

普段は左手に標準装備されており、それ以外の時には腰部の左側にマウントされる。

15.78m対艦刀シュベルトゲベル改兼ビームトンファ

背部に2本マウントされている対艦刀。

『X105ストライク』のソードストライカーを基盤に、グリップエンドにビーム砲を備えている。

更に、刀身を半分の長さで分離する事が可能で、剣尖がある方を持ち、分離した部分からビーム刃を発生させる事で、背面側からの攻撃にも対応できる。

剣尖はアンカーで射出し、牽制、或いはそのまま刺突出来る。

115mmスティグマト肩部ビーム砲

『CAT1-X1/3ハイペリオン』のザバスタ社製ビームサブマ

シンガン、『RFW-99ステイグマト』と同様にパワーカートリッジ方式を採用している為、口径を広げながらも連射性を維持している。

その他

アルミューレ・リュミエール

『アルミューレ・リュミエール』（装甲した光）は、MS用光波防御帯である。

モノフェーズ特性があるので、従来は不可能だった防御帯の内側からの攻撃が可能となっている。

しかし、パワーの消費がかなり激しい為、有効運用には熟練が必要となる。

『X157カタストロフィー』は基本的に、パワー消費を抑えるべく腕部分のみで展開し、シールドとして使用するが、背部の中心と腰部の左右にあるアルミューレ・リュミエール展開面を展開する事で、機体全体を覆う事も可能。

カナード・パルスが搭乗する『X1/3ハイペリオン』のように、光波防御帯を一点に集中させて攻撃武器に転じさせる事は可能だが、前面に引き出す事が出来ない為、攻撃に使用するのは難しい。

パイロット

イア・ジェラス

地球連合軍に所属しているパイロット兼メカニックの女性。

ナチュラルであり、22歳。

サナエの事を良く知る人物ではあるが、決して仲が良い訳では無く、寧ろ彼女の事を嫌悪している。

コーディネイターと同等の力を持つ彼女に対して、強い憎しみを抱いており、彼女がオーブにいる事を知り、侵攻戦に参加する。

その際、今現在の技量では勝てない事を痛感していたイアは、γグリフエプタンを自身に投与してしまう。

γグリフエプタンの強化の度合いを示す『Stage』はレベル2となっている。

しかし、γグリフエプタンの副作用の所為か、当初の“サナエを殺す事”から目的が変わり、“蹂躪してなぶり者にする”事を目的としており、サナエに執拗に迫る。

愛機である『GAT-X000ホロー』は、彼女が自分で改修したγグリフエプタン投与後は、投与以前から信頼のおけるメカニクに整備を依頼している。

機体

GAT-X000ホロー

『GAT-X000ホロー』は、『改良次第でGAT-Xシリーズの機体の武装を装備できる機体』というコンセプトの元に開発された。

形式番号が示す通り、100系、200系、300系のどれにも当て嵌まらない。

300系にも対応できるようにと、関節部分も通常の機体よりも柔軟性が発達している。

装甲は全身が真っ白になっている。

地球連合軍がオーブ侵攻戦の際に投入したGATシリーズの3機（『X131カラムティ』、『X252フォビドゥン』、『X370レイダー』）の主要な武装を盛り込んだ機体。

パイロットであるイアによって、核エンジンを搭載しているが、それを知っているのはメカニクに一部のメンバーとパイロットだけ。核エンジンは、開戦前からありふれた物で、外付けは容易となっている。

そして、核エンジンを問題なく駆動させる為のニュートロンジャマーキャンセラーは、大西洋連邦で量産されており、イアはそれを基

地から強奪した。

ちなみに、『CAT1-X1/3ハイペリオン』も、後に大西洋連邦の月面基地を襲撃し、ニュートロンジャーマーキャンセラーを強奪した。

装備 グラム 貫通槍

『X370レイダー』が持つ、『^{ミルニル}破碎球』の劣化品。

左腕部の甲に備え付けられており、一旦腕を後ろに引いてから前面撃ちだす事で、貫通力を跳ね上げる。

撃ちだす際に、グラムの全体が赤く発光するのは、高周波が駆動している為である。

この技術は、後に開発される『YMAF-X6BDザムザザー』の『ヴァシリエフ』にも採用される。

誘導プラズマ砲・フレスベルグ

『X252フォビドゥン』の背部飛行ユニットと同じ物。

左右にある『88mmレールガン・エクツアーン』の砲身間に形成される磁場の干渉で、弾道を大きく変化させる事が出来る。

100mmエネルギー砲・ツォーン

『X370レイダー』と同様に、機体の口部に配されたビーム砲。

口径はどちらかと言うと小さいが、近距離での威力は凄まじい物がある。

88mmレールガン・エクツアーン

『X252フォビドゥン』のレールガンと同じ物である。

580mm複列位相エネルギー砲・スキュラ

『X131カラミティ』と同様に、胸部に配されたエネルギー砲。

2連装52mm超高初速防盾砲

『X370レイダー』の右手にある盾と一体型の速射砲。

その他

エネルギー偏向装甲・ゲシュマイディッヒパンツァー

『X252フォビドゥン』と同じように、背部飛行ユニット左右に装備されたシールド。

通常のビームコーティングシールドと違い、ビームエネルギー事態を歪曲させる事によって攻撃を防ぐ。

これは、『X207ブリッツ』に採用されていた『ミラージュコロイド』技術の応用で、盾から磁場を発生させて、その力場でビームの進行方向を変化させる特殊粒子を固定するというものである。

また、『誘導プラズマ砲・フレスベルグ』も、この力場と粒子の作用により、変化攻撃を可能としている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3791v/>

【試験作】機動戦士ガンダムSEED -交錯する明日への軌跡-

2011年10月7日06時17分発行